

小児科だより vol.36

BCG と小児結核

2019.8.1 発行

こんにちは。蒸し暑い日が続きます。海やプール、花火や夏祭りなど、外出する機会も多くなる夏休みです。こまめに水分（特に糖分や塩分を含んだもの）を摂り、クーラーなども有効に活用し、睡眠をしっかりとって体調を整え、楽しい夏の思い出を作りましょう。

小児科外来では、手足口病やヘルパンギーナの患者さんが増えています。昨年の8月号の小児科だよりで、『vol.24 手足口病とヘルパンギーナ』について書いておりますので、気になった方は病院ホームページを参照いただくか、小児科外来受付までお知らせください。

さて今月の小児科だよりは、『BCG と小児結核』についてです。結核というと過去の病気のような印象を持たれる方も多いかもかもしれませんが、わが国の2011年の統計でも年間約22,000人が発病し、2,000人弱の方が亡くなっています。実際に、結核接触者健診で当院の小児科を受診される子どもが年間10名程度、その中には実際に結核発症された方との濃厚接触者もいらっしゃいます。

結核菌の特徴として、空気感染するため、インフルエンザなどの接触感染と異なり、同じフロアや同じ施設など、同じ空間にいただけで感染する可能性があります。また、大人から子供に感染することもあり、特に乳児期は重症化しやすいとされ、結核性髄膜炎や粟粒結核などを引き起こし、後遺症を残す可能性もあります。

わが国では結核罹患率がアメリカやカナダの4倍、オーストラリアの3倍、フランスの2倍であり、いまだ中蔓延国とされています。ただし、14歳までの小児結核の罹患率はBCG接種が行われていないアメリカを下回っており、特に5歳まではアメリカの方が2.4倍も多くなっています。この差が、わが国で、ほとんどの乳児にBCG接種が行われている効果と考えられています。

BCG接種後の局所変化としては、通常は3週間くらいしてから腫れたり赤くなり、その後赤みが強くなったり膿が出たりしながら、1-2か月で徐々に赤みが薄くなります。接種して数日以内に変化する場合は、『コッホ現象』の可能性があるので、ご相談ください。また、局所変化に関するパンフレットがございますので、気になった方は小児科外来にお声がけください。

